

大内初夫著 『近世九州俳壇史の研究』

田中，道雄
佐賀大学教養部教授

<https://doi.org/10.15017/12022>

出版情報：語文研究. 57, pp.60-64, 1984-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

大内初夫著『近世九州俳壇史の研究』

田 中 道 雄

本書は、著者のライフワーク、九州俳壇史研究の第一作である。

著者はすでに『芭蕉と蕉門の研究』（昭和四三年刊）を世に問うて声価を高めたが、本書のテーマこそ著者が長期にわたって心血を注いだものである。本書によって学位を授与されたが、A5版七二二ページという浩瀚な外形に、まずその研究の重さが伝わる。初発表のもっとも古いものは昭和三十年、爾来実に三十年にわたって継続された研究の成果なのである。内容は八章に分ち、各章は複数の論文を礎稿としており、大小二八編の論文を集成したものである。しかも各論文は、本書に吸収されるに際して大幅に補筆改訂されており、校正段階でなお新事実を盛り込もうと努める（四〇八ページ）ところに、著者の学問的良心がうかがえる。内容は次の通りである。

序章 俳壇における地方と中央

前編 古風俳諧の時代

第一章 貞門時代の九州俳壇

第二章 談林時代の九州俳壇

後編 蕉風俳諧の時代

第三章 蕉風の伝播と九州俳壇

第四章 四方郎朱拙とその俳壇活動

第五章 野坡の俳壇活動と九州野坡門

第六章 九州俳壇と美濃派俳諧

第七章 半時庵および八千坊系と九州俳壇

第八章 俳僧蝶夢と九州蝶夢門の人々

付録 九州古俳書目録

索引

貞門・談林時代を前編、蕉風時代を後編と二別し、近世前期から中期への俳壇の展開を降時的に述べるが、筆は一部後期の化政時代にも及んでいる。叙述は主要来遊俳人の足跡をたどり、その影響で次第に俳壇が形成される過程を追うのが中心になる。貞門時代の重頼、談林時代の宗因、蕉風時代の野坡・春波・夷柏等々がそれぞれ、彼らの動向が克明にとらえられ、これに集う九州の人々、その中から現われる指導者の姿や、地域的・階層的に拡大して行く俳壇の様相が如実に描かれている。従来、地方俳壇史は一県一國に限られるものが多かった。しかし、行動半径が広い行脚俳諧師の活動は、視

野を広げて始めて把握し得るものだろう。境界を取り払い、九州全域を扱う本書は、一ブロックを対象とした本格的俳壇史の嚆矢をなす。著者は中央俳壇の動きも充分視野に入れつつ述べており、九州という広域俳壇の具体相を通し、読者は俳壇史そのものの展開を見ることがとなる。豊富な引用資料がその臨場感を高める。著者は、第一線俳諧研究者として広い知識を踏まえ、方法において科学的厳密さを貫く。その点で本書は、従来の地方俳壇史諸書の中に屹立する。学問としての本格的な地方俳諧研究は、まさしく本書から始まるであろう。

さらに内容について述べると、各章いずれも力作ながら、中でも著者の本領を見るのは、朱拙（第四章）・野坡門（第五章）・美濃派（第六章）に関する部分である。第四章は十三節に分ち、朱拙の俳歴・交友・編著のすべてが詳細にたどられ、周辺俳壇への宣布など、中央にも知られた九州蕉門の先達の全貌が論じ尽され、野坡流が流行する晩年、「軽み」への理解を欠いて孤立したと結ばれる。読後、快い緊張を覚える一章である。第五章は数次にわたる野坡の来遊を克明に調べ上げ、その影響で次第に門弟一千人に至る様を具体的に述べたもの。従来学界の常識は、蕉門の地方進出について美濃派・伊勢派にとどまっていたので、大内氏の論文の与えた衝撃は大きかった。支派派に先んじる野坡の活動を知り、学界は認識を新たにした。美濃派を扱った第六章の中でも、春波の活動を白日の下にさらした部分は庄巻である。かつて『俳句講座』（昭和八年刊）の「四国・九州俳諧史」がわずか二行ほど触れた春波に、本書は二十数ページをさく。多くの資料によって、十余年にわたって九州を巡遊し、美濃派俳諧を広めたまぼろしの行脚俳人の所業の逐一を再

現し、その正体を明らかにして行く。元来乙由門の春波が、世情を察して獅子門俳諧師として俳諧を売った事情、このことからんだ同門沾耳坊とのいさかいなど、行脚俳諧師の生態を手取るように浮かび上らせる。また春波ら伊勢系の傍流獅子門に対し、安永以後以哉坊らの正統獅子門俳人が来遊し、活動の地域を異にするなどの指摘もおもしろい。ともあれ本書の白眉は元禄期・享保期にあるように思われる。

特に印象に残った部分を挙げてみたが、他に眼を転じても、本書によってその存在が浮かび上った俳人は数えきれない。例えば貞門の一見（四四べ）、美濃派の乙語（三一八べ）、蝶夢系の石蘭（四四八べ）などその一例で、本書によって活動が明らかになり、それにふさわしい評価を得たわけである。来遊俳人も、顕成（三四べ）、嶺雲（三三七べ）、露牛・巽我（三五二べ）、塘雨（四二三べ）ごとき中小俳人に至るまで実に多くに照明が当てられ、著者の目配りの細かさが知られる。その一々は、直接本書についていたぐしかない。

本書は各流派の活動の様態を淡々と叙述して行く。華やかな言辭を弄することなく、何よりも事実を尊重し、事実をして歴史を語らしめる。読む者は、貞門・談林の古風から蕉風へ、蕉風も元禄期から享保期へ、さらにそれ以後へと移り変わる九州俳壇史の総体を、読むに従い次第に我がものとして行く。著者に深い信頼を寄せながらも、安定した力強い筆致に引き込まれて行く。そのような事実中心の本書は、事実を提示することによって、まことに興味深い俳壇の史的变化をも解明する。蕉風の主力が、朱拙から野坡流へ（二二二べ）、野坡流から美濃派へ（二九一べ）と移り変わることの指摘がま

ず注目される。九州俳人の朱拙から来遊俳人による組織的宣布へ、「猿蓑」調から軽み調べ、さらに理論を伴う美濃派俳諧へ——かうに把握された地方俳壇の変遷は、俳壇史にとどまらず、俳諧史の流れをも照し出す。また、俳書への入集者の範囲が元禄頃はごく限られていたのに、宝永頃には他俳壇からも入集し、地方俳壇相互の交流が盛んになる（一六四べ）、化政期に至ると来遊した宗匠（屋島）が他門俳人をも訪ねて雅交を楽しむ（三九七べ）という指摘も注意したい。半時庵および八千坊系の活動を扱った第七章も、従来ほとんど知られなかつた分野で、独力で切り拓かれた大内氏の功績は大きい。都市系俳諧の地方進出というテーマ自体きわめて新鮮な問題をはらむが、氏は多面的によくその実態をとらえ、この都市系俳諧が代官領の俳人に広がり、日田でも隈町方面の美濃派に対し、代官所に近い豆田町に淡々流が流行した（三五六べ）、田鶴樹の九州行脚は、天領だった豊後小浦から始まった（三六〇べ）などの興味深い事実を明らかにしている。また、当初蕉風の伝播が九州の西北部と中部に限られたのは、行脚俳諧師の主な目的地が太宰府神社・長崎・阿蘇山にあったからで、この三点を結ぶ三角形の周辺に蕉風が盛行した（一六三べ）、化政期の淡々系の俳風は次第に平明化してその特徴を失った（三九八べ）との指摘、俳人の所属階層の調査（三八一べ他）なども貴重である。

大内氏の研究方法は、まさに正統派のそれである。まず資料の徹底した博搜がある。来遊俳人の九州紀行を洩れなく集める。それぞれの紀行について経路と交渉俳人が調べ出される。次に九州俳人の中央俳書への出句状況が網羅的に調査される。また九州俳人の編集した俳書が幕末に至るまでリストアップされ、内容が確かめられ

る。いずれにせよ、大内氏はすべての俳書に目を通さざるを得ないだろう（寛政期以降は無理としても）。いま、索引より検するに、大内氏の利用した俳書は無慮一千点、これは大変な数だが、本書に利用したのが一千点なのであって、閲覧して利用しなかつた俳書もこれに匹敵しよう。歌人・俳人を調べるには、歌集や句集を繰ざらしなければならぬが、無数の俳人を調べるといふ困難な作業に大内氏はよく挑まれた。これだけの俳書を見るために、大内氏はどれだけ多くの図書館や個人所蔵者を幾度遍歴しなければならなかつたことか。写真やコピーが普及しない時代、氏は借り出した俳書を原稿用紙に丁寧に筆写するのが常であったが、それも膨大な量に及んだと推察する。本書の価値はまず、著者の持つ抜群の情報収集力にある。そしてその大量の情報に見事な秩序を与えて体系化した。孜孜として倦まぬ努力と、強い意志力のしからしめるものである。

次に大内氏が、これらの資料を無批判に使うのでなく、そのいずれにも厳しい検証の眼を注いで利用することを注意したい。例えば朱拙の伝を成すに当って、朱拙自身の語を引く「土大根」を盲信せず、この資料の意識的曲筆を見抜いて正確を期す（一七七べ）。本書の内容は、どこまでも果てしないほどに新しい事実をつきつける。その事実報告の長い糸のところで、珠のように光る手堅い考証がはさま込まれる。本書は事実と考証に充たされている。例えば朱拙の数度にわたる江戸・上方への行脚についても、旧説を引きながらそれにとらわれず、一つ一つを丁寧に年次決定される（二〇四べ）が、そのような精緻な作業が全編に見出せるのである。また朱拙編著の板下筆者が風国であるとの説に対し、朱拙の短尺や句稿を手がかりに朱拙自筆板下と断定する（一八三べ）など、わずか

四行ながら実証による明快さが光っている。多くの資料に眼をさらした大内氏ならではの説得力を持つ。ついでに記すと、大内氏は先学の業績に、昭和初期の俳句雑誌に至るまで実に丹念に眼を通してゐる。しかも充分慎重に検証した後、それを本書に活かしている。また、地方発行の郷土史関係の文献にも広く気を配り、地方の民間研究者とも緊密な交渉を保っている。その情報収集のきめ細かさには驚く。

また、本書を豊かに肉づけするのは、著者の精力的なフィールドワークの成果である。刊本俳書を徹底的に調査した上、著者はさらに古俳人ゆかりの地に足を運んで数々の写本資料を発掘し、それを十二分に利用する。例えば福岡県浮羽郡で稿本「鉢袋」を発見し（一三四ペ）、この資料によって野明の出自や野坡門の扶植を詳密に描き出す。また地方宗匠の兎城が数人の門弟を遣わして野坡の器量を見にやり、その報告に基いて門弟ともども野坡に師礼をとった（二三八ペ）など、写本資料ならではの記事内容で、このように近世俳壇の生の記録を用いるのも本書の魅力の一つである。日田市の稿本「若脚」（一六五ペ）、福岡県田主丸町の「市山句帳」（二四六ペ）、宇土市の「俳諧白魚余稿」（三一二ペ）など枚挙の暇なく、ここにも著者の実証精神と探求の情熱がうかがえる。俳人の子孫を訪ね、菩提寺で過去帳を改め、墓碑を掃苔するのは常のことで、芭蕉塚は勿論、九州に七基ある野坡塚もすべて現地踏査されている（二六七ペ）。丹念な現地調査によって得られた資料は零細な一物にも及び、例えば国分市の三千風の句文（一一三ペ）、日田市の野坡の真蹟俳文（二二二ペ）、行橋市の支考の書簡（二八五ペ）、佐賀県相知町の湖天の書簡（三七四ペ）など、本書の内容を一層生

彩あるものにしてゐる。

本書が多くの資料を用いることは再三述べたが、利用の便を高めるものとして索引がある。発句・付句等約六〇〇項目、書名約一〇〇〇項目、人名約三五〇〇項目、著者は資料につき人物につき、その都度能う限りの解説を施している。従って詳細な索引は、本書を九州俳諧事典として利用することも可能ならしめる。また各章にはそれぞれ数十項に及ぶ詳しい注が付され、中には考証や資料紹介を含む長文の注も多い。またここで参考文献が一覧できるのも有益である。かように周到な配慮あって、本書がわれわれ後学を利用するところ甚だ大きい。

付録の「九州古俳書目録」は二〇〇ページにも及び、五十音順で約八〇〇点を掲出する。書誌事項は勿論、所蔵者・内容略記も付し、原本未発見の書まで記載して、九州俳諧研究の基本文献を成す。この中には著者の架蔵書も少からず、これだけ多数を調査発見し、また収集した大内氏の苦心は想像に余るものがある。探索三十年の成果を、いま惜しげなく学界に提供されたことを感謝したい。今後われわれが蒙る便益ははかり知れない。

多言を弄して来たが、本書を読了して何よりも強く感じるのは、大内氏の学問に対する誠実さである。一抹のけれん味なく冗語なく、大冊から溢れるような事実の提示の前に、読む者は著者大内氏の人間としての強さと誠実さを充分に知らされるだろう。本書は大内氏にして始めて成し得た業績であり、事実の集積において、これを凌駕するものは今後現われ得ないだろう。大内氏は九大における恩師杉浦正一郎博士の学統を受け継ぎ、これを見事な大輪に開花せしめた。版元もテーマにふさわしい九州大学出版会である。本書の

刊行は、わが九州の文化的所産としてもきわめて意義深いものと言える。あとがきによると、著者は近世後期を中心とした続編を企画中という。稿を終えるに当り、その大成を期待すること切である。

(一九八三年一二月、九州大学出版会発行。八八〇〇円)